かながわと世界をつなぐ

KIF NEWS

2012.1
No. 27
（財）かながわ国際交流財団
Kanagawa International Foundation

ケイアイエフ　ニュース

写真：上下ともに 21 世紀かながわ円卓会議の様子

特集

未来のかながわのコミュニティづくり
―東日本大震災を契機に考える―

当財団は2011年11月５日・６日に「新しいかながわを築く―コミュニティを支える医療・教育・文化」をテーマとして“21世紀かながわ円卓会議”を開催しました。会議の中で議論された、東日本大震災後の社会情勢の変化を踏まえた、かながわにおけるこれからのコミュニティのあるべき姿について県内事例を交えながらお伝えします。

21世紀かながわ円卓会議の歩み …… 4
湘南国際村学術研究センターの出版物と購入方法をご案内します …… 5
ご寄付のお願い ―新しい寄付制度をスタートします― …… 6

KIF SPECIAL INFORMATION

多文化共生・ＮＧＯ協働推進センター「図書コーナー」をご利用ください …… 7
多文化共生・ＮＧＯ協働推進センター「作業コーナー」をご紹介します …… 7

KIF INFORMATION & REPORT

多文化共生・ＮＧＯ協働推進センター／湘南国際村学術研究センターから …… 8
国際学生会館だより …… 9
県内ＮＥＷＳ―県内の多文化共生に関係するニュースをお知らせします― …… 9

KIF SPECIAL INFORMATION　ミュージアムサミットに参加しませんか？ …… 10

KIF INFORMATION　財団賛助会員募集のご案内 …… 10

表紙写真：淵野辺で開催された『留学生と市民のつどい』にて着付を体験した留学生達

特集：未来のかながわのコミュニティづくり
―東日本大震災を契機に考える―

３月11日の東日本大震災は、日本の政治や経済に大きな影響をもたらしました。そればかりでなく、大惨事にともなう避難所生活や福島の原発事故による停電などの様々な経験は、私たち一人ひとりにこれまでの暮らし方や家族の絆のあり方などについて再考を迫るものでした。今回の大震災は、これまで見過ごされてきた地域課題を改めて浮き彫りにするとともに、現在の社会を見つめ直し、より良い「これから」を目指す機会とも言えるでしょう。

当財団が2011年11月５日・６日に「新しいかながわを築く―コミュニティを支える医療・教育・文化」をテーマに開催した“21世紀かながわ円卓会議”（以降、円卓会議）では、先のような認識のもと、震災後の社会情勢の変化を踏まえ、かながわにおける、これからのコミュニティのあるべき姿を探るため、県内事例を踏まえて議論を展開しました。

ここでは、モデレーターを務めた神野直彦さん（東京大学名誉教授）による円卓会議の趣旨説明と、教育と文化に関する県内の取り組み事例を中心に、当日の講演の概要をご紹介します。

■震災から学んだもの ～生命主義・共生主義・参加主義～

神野直彦さんの趣旨説明より

最近の海外メディアを見ていると、震災を経験して、日本人は寄り添って生きることの大切さを感じていたはずが、それを失いつつある、と報道しています。危機は必ずものごとの本質をあぶり出しますが、私たちもこの震災を経験して、ものごとの本質に気がつき、学びとったものがあるはずです。そしてそれは、次の３つにまとめられると思います。

一つは、私たちの社会で最も価値あるものは人間の生命であるという生命主義です。この生命主義を踏まえると、それぞれのコミュニティで生きる人びとが織り成す絆、宇沢弘文先生（東京大学名誉教授、経済学）がおっしゃっているような意味で言えば、社会的共通資本としての医療が重要なテーマとなるでしょう。

２番目は共生主義です。この共生には「人間と人間との共生」と「人間と自然との共生」という２つのレベルがあり、コミュニティの視点で考えると、“教育”の役割が大切です。つまり子どもたちの教育について、２つの共生がつくりだす「自然の緑が織り成す木陰」と「人間と人間との絆が生み出す木陰」のコミュニティの中で、子どもたちを育てたいと思うようになることが大切でしょう。さらに、それぞれの地域で異なる顔を持つ自然と人間との関係に基づいて、いかなる生活様式（当然ですが、そこから価値観や感受性も形成されてきます）を編み出していくのか、という問題があります。そしてその生活様式のことを、私たちは“文化”と呼んでいます。

最後は参加主義です。私たちが共に生きて社会を形づくっていくとき、直面する困難に対して、私たち一人ひとりが傍観者としてただ見ているのではなく、その困難の解決に向けて自ら参加していくことで社会をつくることを学びました。私たちが「生きる」ことの意味を求め、新しいビジョンを形成しようというときに重要なのは、親和的な対話であり、そのためには共同体意識が欠かせません。いつも私が話す例で言えば、家族の中では親和的対話が可能になるのは、家族の中では誰もが誰もに対して、幸福になることを願いあっている、という確信があるからです。

新しい社会のビジョンを目指す、その歩みは躊躇に満ちて、弱々しい一歩ではありますが、こうした歩みを続けて行くと、洞察と自信が深まり、非常に大きなインスピレーションに結びつく可能性に富んでいます。人間が見せる最も美しい笑顔は子どもが最初に歩いた時に見せる笑顔だと言われていますので、私たちは最初の一歩が本当の祝福に結びつき、新しいビジョンを描く試みの旅立ちの時の一助となればと思います。

■かながわのコミュニティづくり１ ～横浜市立東山田中学校コミュニティハウス～

竹原和泉さん
（横浜市立東山田中学校コミュニティハウス館長）

東山田中学校区は、港北ニュータウンにある、まだ７年目の新しい中学校区です。学校は、コミュニティ・スクールとして開校することが教育委員会で決定され、平成17年春に開校しました。そして、この中学校区には３つの小学校がありますが、それらを含めて一つのコミュニティとして活動するための組織が学校運営協議会です。私はその副会長もしています。７年間この活動に関わっていま

神野直彦さん

竹原和泉さん

写真：手前から神野直彦さん、佐藤晴雄（日本大学文理学部教授）さん、竹原和泉さん、小澤光男さん

写真：小澤光男さん

写真：飯島重一さん

写真：左から神野直彦さん、色平哲郎さん（JA長野厚生連・佐久総合病院地域医療部地域ケア科医長）、町田宗仁さん（厚生労働省相双地域医療従事者確保支援センター）

すが、試行錯誤の毎日であり、徐々に気がついたことは、この学校運営協議会は、学校の最大の応援団であるとともに、辛口の友人であることがわかってきました。つまり、良かれと思うことがあれば意見も言いますが、その一方で汗も流します。これは、地域が根本から学校を支え地域とともに歩んでいく、そして地域全体で子どもを育てることが、大人やコミュニティ全体にとってもプラスであるという発想の大きな転換です。それは大人にとっても新しい学びであり、生涯学習の一環としても捉えることができるのではないでしょうか。

中学校の中にあるコミュニティハウスは公設民営で、私は市民として運営に携わっています。活動の一つの柱として、“子どもも大人も一緒に集い学ぶ場”として、用があってもなくても自由に出入りし、行ってみたくなる地域のいわば“縁側”や“広場”のような場所となるように、禁止事項を書いた張り紙などは貼らず、気持ちよく過ごせる雰囲気を大切にしています。またこれまでにも、学校を応援する学校支援地域本部として、中学生やお父さんたちに関わってもらいイベントを開催しました。

学校と地域を結ぶために必要なものが3つ。「情報を共有すること」、「思いを共有すること」、そして「アクションを共有すること」です。まず情報共有のためにコミュニティカレンダーを作りました。これには、4つの学校と地域の行事がすべて載っています。私自身がアメリカで5年間子育てをしていたときに、同様のものがあり、その地域と文化を知らず、言葉もそれほど自由でない外国人の私でさえも、地域のボランティアとして参画できたのはカレンダーのおかげでした。またカレンダーをつくるプロセスでさまざまな人たちが出会い調整し、どういった情報を出すか学校同士が考えたりすることができます。キャリア教育もやっており、「プロに学ぶ」「職場体験」「面接」など、さまざまな地域の企業にお願いをしています。学校のよい噂はなかなか広まらないものですが、キャリア教育を通してきちっと伝わっていくようになっています。

3.11の震災を契機に、今を生きる私たちに何ができるかといったときに、地域を決めてつながっていきたいと思い、岩手県山田町と小さな糸を結びました。それによってさまざまなことが起こり、人がつながり子どもたち同士のコミュニケーションを促しています。震災後の宮城県内の小中学校の聞き取り調査で、学校支援地域本部がある学校は、避難所において自治組織が順調に立ち上がったことが判明したそうですが、教育というテーマでさまざまなものがつながって信頼が生まれるのではないかと思い、活動しています。

■かながわのコミュニティづくり2 ～こども防災大学～

小澤光男さん（横須賀市消防局消防・救急課長）

「こども防災大学」の目的は、次世代を担う「未来の防災リーダーを育成する」ことです。小学校5年生を対象に（4年生の時に学校のカリキュラムで「消防・警察を学ぶ」があります）、「自助」「共助」「公助」の防災に対する知識や姿勢などを総合的に学ぶ機会を提供しています。市内の小学校に案内を出しますが、今年度は147名が参加しました。参加者が中学生や高校生になったときに、地域の手助けをしてくれる人材を育成したいという狙いがあります。

カリキュラムは、体験学習を中心としており、まず自分の身を守る方法を身につけてもらうことが大事だと考えています。消火や救助訓練、避難所生活、防災機材、サバイバルの知恵を学ぶといった、とにかく生き延びることを目的として、防災の知識を教えるというよりは、生き延びる姿勢を学んでほしい、生き延びなければ人の手助けはできないということです。

全体は開講式・閉講式を入れて5日間のカリキュラムですが、消防局だけではなく参加協力機関として、在日米海軍司令部地域統合消防隊（基地での消火体験など）や、久里浜にある港湾空港技術研究所（施設内で津波・液状化現象の実験を行う）、市民活動団体の三浦半島活断層調査会（活断層地震の防災講話）、早稲田大学防災教育支援会WASEND〈ワセンド〉の団体があります。WASENDは学生さんたちのグループで、地震発生時の体験として、たとえば子どもたちに卵の殻の上をはだしで歩いてもらい（怪我はしませんが非常に痛い）、ガラスの破片の上を歩くとさらに痛いということを感じてもらっています。

開講式には、市長が学長として出席しますが、市役所に集まる子どもたちは、自分から応募しているので、市長の防災講話を非常に熱心に聞きます。米海軍横須賀基地の消防体験では、日本の消防隊とは全然違う装備や消防車両があり、子どもたちが憧れるような雰囲気を持っており、その意味では異文化を学ぶ体験にもなっています。

小学校の体育館を使った避難所体験も行います。去年までは宿泊体験もありましたが、今年はさまざまな事情や子どもたちの安全の確保を考えて宿泊体験は取りやめ、バケツリレーや担架の取り扱いなど、自分たちが自ら助ける側になれるように、（危険なことはさせられませんが）みんなで地域のお手伝いができるようにということで取り組んでいます。また、昼食は、お湯を入れて作るアルファ化米とお湯で温めたカレーの非常食を食べます。他にも給水体験として水道局に協力してもらいながら、非常用の給水体験も行います。最後の閉講式では「こども防災博士」という学位を授与しています。

「こども防災大学」は、平成14年から田浦にある北消防署で始められましたが、19年度「防災まちづくり大賞」消防庁長官賞、20年度防災功労者内閣総理大臣表彰をいただき、21年度からは全市的に取り組んでおります。これまでに811人が卒業しており、この中には成人してファイヤーマンとして消防局の職員に採用されている卒業生もいます。

■かながわのコミュニティづくり３ ～オショロ流し～

飯島重一さん（三浦市教育委員会生涯学習課主任）

精霊流しは各地にありますが、三戸のオショロ流しは、旧盆（８月13～16日）の伝統行事で、13日に家に帰ってきたご先祖様（オショロ様）を仏壇に飾り迎えて、お盆を過ごし、16日の朝にお供え物と共にオショロ様を西方の海に送るものです。この行事では、子どもたちが重要な役割を果たしており、その点が評価され今年３月には国の重要無形民俗文化財に指定されました。また三戸では、このオショロ流しだけでなく、１月７日のおんべ焼き、そして秋の十五夜、十三夜など、年間を通してセイトッコ（小学校１年生から中学校３年生までの男の子の呼称）が活動しています。ちなみに県内では子どもたちが行う行事として、大磯の左義長や秦野の道祖神祭りなどがあります。

オショロ流しが行われている三戸地区は、三浦半島の相模湾側に位置し、晴れた日には富士山を望む海沿いのまちです。159件の世帯からなる集落の裏手には畑の台地が広がり、人口の流入・流出もほとんどありません。ほとんどの世帯は農業が主体で、そのかたわらに漁業を営む人たちもいます。

当日までの準備として、セイトッコは船の飾りをみんなで集まってつくりますが、こうした作業は、中学３年生の一人が大将となり、指示を出して仕切ります。こうしたなかで、自然に上下関係や礼儀、あるいは道具の使い方なども学んでいきます。また16日当日の朝は、オショロ船の船べりとなる縄をわらで綯（な）いますが、その作業は小さな子どもも手伝い、世代を越えた共同作業で行います。船が完成すると、住職がご先祖様をお送りするお経を読み上げ、出航となります。船の先端に縄がつけられ、セイトッコがその縄の先端にくくりつけられた板を抱いて船を泳いで引っ張ります。

船は沖まで行くので、安全のため、２，３艘の船が周りにつきそいます。以前は、沖に出るとセイトッコは手を離し、船は波に漂うままに流していましたが、海流や風の向きによっては、定置網に引っ掛かったり、近くの海水浴場に漂着することもあり、その時には三戸の人たちが船を出して回収していました。現在は、沖まで出て、気持ちとしてはオショロ様を西方浄土に送った後に、船を陸にまた引き揚げ、解体して２、３日干した後に焼却しています。

オショロ流しはセイトッコが中心になりますが、それを支えるように、セイトッコの役員や親、若い衆の世話人たちが主に船造りを担当し、セイトッコの母親たちは、出航した後の海岸を掃除します。各家庭の女性たちは、仏壇に供えたオショロ様を砂浜まで運び、男性のお年寄りたちは、砂浜には立ち入らず遠くの方から見守ります。コミュニティのそれぞれの人たちがオショロ様を西方浄土に送るための役割を果たしています。

セイトッコは大人の仲間入りをする入口の部分であり、さらに大人の仲間入りをするための元服式が行われています。元服式は７年に一度行われる行事で、中学１年から高校３年生までが対象となり、元服式を迎えると若い衆の仲間入りができ、そこで初めて若い衆の行事にも参加できます。こうした過程を踏んで大人へと成長していきます。

■他のセッションから ～地域主権の医療、自然エネルギー、社会教育～

円卓会議では、この他にも多様な視点からコミュニティの将来像について討論しました。地域医療をテーマとしたセッションでは、長野県の佐久総合病院医師・色平哲郎先生から、地域の人々に寄り添った医療について、また、人の生命を扱う医療サービスの本質を考えさせられるお話がありました。

自然エネルギーのセッションでは、神奈川県の黒岩知事から、神奈川県における安心で安定した電力需給の実現をめざす「かながわスマートエネルギー構想」の具体的取組みについて解説していただきました。自然エネルギーが持つ可能性についてお話いただいた環境エネルギー政策研究所の飯田哲也所長は、その効果的な普及のためには、地域に根付いた取組みが必要であることを強調しました。

最後の総括セッションでは、平塚市の落合市長より、住民同士の助け合いの場である「町内福祉村」や自主防災組織の活動、そして社会教育施設としてだけではない、まちづくりや地域自治の拠点としての公民館のあり方についてのお話をいただきました。

２１世紀かながわ円卓会議の歩み

21世紀の課題を討論するシンポジウムとして2001年に始まりました。毎回、掲げられたテーマのもと、20名前後の様々な分野の研究者や実務家を講師・討議者として迎え、分野を横断して討議を行ってきました。開始当初は、グローバリゼーションによる世界の政治・経済・社会の変化に関する議論が中心でしたが、回を重ねるごとに、グローバル化による負の側面が国際社会にもたらす弊害や、その潮流のなかの日本社会のあり方、そして、地域や社会的コミュニティがもつ可能性や人と人とのつながりに議論の焦点を移してきました。現在は県内外の自治体が取り組む政策等の事例を参考にしながら、“コミュニティ”をキーワードに、これからの日本のあるべき姿を神奈川から発信すべく、議論を重ねています。今後の「21世紀かながわ円卓会議」に、ご注目ください。

第１期（2000―2002 年度）全体テーマ“グローバリゼーション”	
2001 年２月	グローバリゼーションと新しい価値観
2002 年２月	グローバリゼーションの進展と市民社会の役割
2003 年３月	グローバリゼーションのゆくえと日本
第２期（2004―2006 年度）全体テーマ“21 世紀を構築する”	
2005 年３月	超大国のゆくえと日本の対応
2006 年３月	世界を走る亀裂―グローバル化に何ができるか
2007 年３月	地球と地域との協働の道―社会関係資本を組み立てる
第３期（2008・2009 年度）全体テーマ“新しい都市と地域”	
2009 年３月	都市と地域の未来を拓く～まちづくり・ものづくり・ひとづくり～
2010 年３月	築かれる都市と地域の未来～人の絆・文化の絆を紡ぐ～
第４期（2010・2011 年度）全体テーマ“コミュニティが育む人間性”	
2011 年３月	ひとを育むまちをつくる～成熟社会かながわへ～ ※ 東日本大震災により中止
2011 年 11 月	新しいかながわを築く～コミュニティを支える医療・教育・文化～

湘南国際村学術研究センターの出版物と購入方法をご案内します

湘南国際村学術研究センターでは、これまでに実施したセミナーや調査研究の報告書を作成、販売しています。その一部をご紹介します。
※価格には送料を含みます。（肩書は当時）

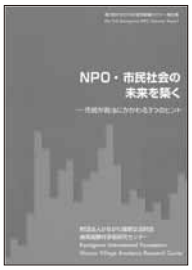
21 世紀かながわ円卓会議報告書
『都市と地域の未来を拓く～まちづくり・ものづくり・ひとづくり～』

環境破壊、地域社会の疲弊、人間性の喪失など様々な課題を抱える都市と地域の未来について、まちづくり・ものづくり・ひとづくりの視点からアプローチした円卓会議の講演概要（2009年３月開催）。講師は岡部明子（千葉大学大学院工学研究科准教授）、村山裕三（同志社大学大学院ビジネス研究科教授）、北川フラム（株式会社アートフロントギャラリー代表取締役）など。司会は神野直彦（東京大学大学院経済学研究科教授）。
［300 円／ 48 ページ／Ａ４判］

21 世紀かながわ円卓会議報告書
『築かれる都市と地域の未来～人の絆・文化の絆を紡ぐ～』

「都市と地域の未来」をテーマとした前回の円卓会議の続編として、人と人の絆、そして自らの生きる場や生活様式（文化）とのつながりに焦点を当てた円卓会議の講演概要（2010年３月開催）。講師は、寺谷誠一郎（鳥取県智頭町長）、川勝平太（静岡県知事）、佐々木雅幸（大阪市立大学大学院教授）、広田照幸（日本大学文理学部教授）、清原慶子（東京都三鷹市長）など。司会は神野直彦（関西学院大学大学院教授）。
［400 円／ 76 ページ／Ａ４判］

かながわ非営利組織セミナー報告書
『NPO・市民社会の未来を築く―市民が政治にかかわる３つのヒント』



2010年３月に開催されたセミナーの記録集。「市民社会」と「政治」の関係性をテーマに、「民主主義理論」の考え方や「アジア諸国の民主化」の潮流などを参照しながら、非営利セクターの位置づけや役割などを議論。講師の広岡守穂（中央大学法学部教授）と岩崎育夫（拓殖大学国際学部教授）による講演のほか、講師、リソースパーソン、参加者を交えて行われたディスカッションを記録。
［400 円／ 58 ページ／Ａ４判］

かながわ非営利組織セミナー報告書
『ＮＰＯ・市民社会の未来を築く―非営利活動の正当性を問う』

2011年２月に開催されたセミナーの記録集。非営利活動における「正当性」をテーマに、非営利活動の望ましい姿や、非営利組織と行政との協働のあり方などを議論。栗原彬（立教大学名誉教授、立命館大学特別招聘教授）、谷本有美子（社団法人神奈川県地方自治研究センター研究員）による講演のほか、「まちづくり」や「多文化共生」などの分野で活動する神奈川県内の実践者からの事例報告など。
［500 円／ 70 ページ／Ａ４判］

調査報告書
『ミュージアムと地域社会考察のためのヒアリング調査』

ミュージアムの公共性、隣接分野・多分野の関係者の参画などをキーワードに、現在のミュージアムの課題について関係者へのヒアリング、ワークショップを行った成果。400人の関係者を巻き込んだイギリスのミュージアム改革、指定管理者制度の先行事例としての長崎歴史文化博物館の事例報告、図書館関係者によるMLA連携の可能性、科学リテラシーとミュージアムリテラシーなど多彩な内容。
［500 円／ 134 ページ／Ａ４判］

インタビュー集
『知をめぐる対話　Vol. 2』

インタビューの収録内容：佐伯胖（絵を見ること、わかること、それが文化的実践になるとき）、高島肇久（言葉の重み）、武部恭枝（名著との対話がリーダーシップを創る）、野村雅一（進む社会的な記憶喪失）、色平哲郎（病める日本と命の格差に向き合う）、諸富徹（「冷静な頭脳と温かい心」で経済ビジョンを）、大芝亮（東アジアの進むべき道とは）、滝田賢治（今を生きること）、田中弥生（今、求められる市民性の創造）、川崎あや（異端を恐れるなかれ）
［500 円／ 70 ページ／Ａ４判］

申込用紙・購入方法　ＦＡＸ：０４６－８５８－１２１０

下記の必要事項を記入してＦＡＸまたは電子メールでお送りください。代金は折り返しお知らせする横浜銀行の指定口座へお振込ください（振込手数料は購入者の負担になります）。なお、手続きを経てご注文品の到着まで、10日程度のお時間が必要です。

注　文　品　名		希望冊数	
注　文　品　名		希望冊数	
氏名（ふりがな）			
氏　　名			
ご　　所　　属			
ご　　住　　所			
電　話　番　号	ＦＡＸ番号		
メールアドレス			

●問合せ：湘南国際村学術研究センター
TEL: 046-855-1822　FAX: 046-858-1210　E-mail: shonan@k-i-a.or.jp

ご　寄　付　の　お　願　い
―新しい寄付制度をスタートします―

KIF 財団法人 かながわ国際交流財団
理事長 福原義春

当財団では平成５（1993）年に『かながわ民際協力基金』を創設し、以来これまで皆さまから、多くのご寄付、ご協力をいただいてまいりました。おかげ様で、神奈川県内のNGO等が実施する先進的かつ有意義な海外協力活動、国内協力活動等に助成を行い、これまでに105件、総額１億３千万円の助成を達成し、大きな節目を迎えることができました。この『かながわ民際協力基金』で育った県内のNGO等の多くが、今まさに、全国的にも先進事例となる活動を積極的に展開しております。

現在、神奈川県内においては、外国人住民の増加と定住化、世界同時不況や東日本大震災等を契機とした生活不安と連動して、著しい変化が起きています。当財団では、これらの変化等に迅速・的確に対応していくため、今年度から、中期重点目標を『持続可能な多文化共生の地域社会かながわの基盤づくり』に据え、事業の柱を下記のとおり大きく四つに定め、これらの事業を通し、県内全域を守備範囲とする唯一の第三セクターとして、官民その他の異なるセクター相互間をつなぐ『中間支援組織』としての役割・使命を最大限に発揮しながら、目標の達成に向けた取組みに全力を挙げております。

このたび、これらの新しい取組みをより実効あるものとするため、財団のすべての取組みを皆様に応援していただけるようにし、寄付者の皆様に寄付金の使途をご希望の事業に指定していただく新しい寄付のしくみを設けました。

つきましては、どうかこの新しい寄付制度の趣旨をご理解いただき、持続可能な多文化共生の地域社会かながわの基盤づくりの取組みを着実に進めていくため、ご厚意を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

４つの事業の中からお選びください

1

①「多文化共生の地域社会かながわづくり」にご寄付

外国人住民に向けた「防災」「教育」「医療」などの生活情報・行政情報の多言語による発信、外国につながる子ども支援のためのガイドブック作成等による子どもの学習環境の整備などを強化し、県内全域の多文化共生の地域社会づくりを推進します。

（写真：ガイドブック『日本生まれの外国につながる子どもたち～どうやってサポートすればいいの？～』／多言語医療問診票）

2

②「県民・NGO等との連携・協働による国際活動の促進」にご寄付

かながわのNGOが行う先進的かつ有意義な海外協力活動や多文化共生の地域づくりの活動に資金助成する“かながわ民際協力基金”をさらに充実させます。

（写真：教育を通したネパール少数民族のエンパワメントのための助成プロジェクト）

3

③「国際性豊かな人材の育成」にご寄付

高校生・大学生・大学院生を対象とした、各種セミナー等を通じて地球規模の課題等の解決のためにグローバルに活躍できる人材を育成します。

（写真：高校生を対象とした国際学のセミナー）

4

④「学術・文化交流を通じた地域からの将来像の提案」にご寄付

学術・文化などの分野における人と人との交流を通じて、魅力ある神奈川を創造するための知恵を国内外から吸収・蓄積し、県内外に発信することを通じて、持続可能な神奈川の地域社会づくりを推進します。また、グローバル化の中で変化に曝されている地域の力、地域文化力の再生・振興を図ります。

（写真：21世紀かながわ円卓会議）

振込先　ゆうちょ銀行：00280-4-49894　加入者名義：財団法人かながわ国際交流財団
通信欄にご希望の事業名または事業の番号（①～④）をご記入ください。

注１　「県民・NGO等との連携・協働による国際活動の促進」の場合は「かながわ民際協力基金」に積立てさせて頂きます。
注２　無記入の場合は当財団で使途を決定させていただきます。
注３　当財団は特定公益増進法人であるため、税制上の優遇措置を受けられます（2012年３月11日入金まで）。確定申告用の寄付金受領証が必要な方は、通信欄に「確定申告用受領証　要」とご記入ください。お急ぎの方は下記までご連絡願います。

問合せ　財団法人かながわ国際交流財団　寄付担当
〒221-0835　横浜市神奈川区鶴屋町二丁目21番地８　TEL：045－620－0011　Email：tabunka@k-i-a.or.jp

KIF SPECIAL INFORMATION

多文化共生・NGO協働推進センター「図書コーナー」をご利用ください

多文化共生・ＮＧＯ協働推進センターには、外国籍児童・生徒支援、日本語学習、多文化共生教育等の資料をご利用いただける図書コーナーがあります。どなたでも閲覧いただけます。

教材選びや資料・教材の活用方法について、メールや電話等でのお問い合せにも対応させていただきます。併せてご活用ください。

■図書コーナーの教材資料リストができました

図書コーナーにある教材や資料のリストを当財団のホームページで公開しています。下記のＵＲＬをご覧ください。

●URL: http://www.k-i-a.or.jp/library/

■図書コーナーで配布している報告書

図書コーナーでは財団がこれまでに発行した報告書を配布しています。ただし、在庫には限りがありますのでご了承ください。

① かながわの多文化ソーシャルワークの推進に向けて
　―多文化ソーシャルワーク検討事業報告書　―（発行：2011年２月）
② 多言語生活情報の提供・流通　その３
　～多言語情報の効果的な伝達に向けて～（発行：2008年３月）
③ 多言語生活情報の提供・流通　その２
　～多言語生活情報センターの活動の展望～（発行：2006年３月）
④ 多言語生活情報の提供・流通　～その現状とこれから～（発行：2005年３月）
⑤ グローバル時代の国際理解教育にむけて
　～グローバル教育と多文化共生教育のインターフェイス～（発行：2004年３月）

●料金：全て無料です。（下記のＵＲＬから電子版のダウンロードもできます。）
●URL：http://www.k-i-a.or.jp/shuppan/report.html

●ご利用時間

センター開室時間と同じ
（月曜日～金曜日午前８時30分から午後５時15分まで。祝日、年末年始は閉室）
※上記以外のご利用については、ご相談ください。

●図書の分野

①多文化共生（一般図書、報告書など）
②外国籍児童・生徒支援（日本の学校生活を説明する多言語資料、学校から家庭への通知文翻訳集、教科学習教材、進学ガイドブックなど）
③日本語学習（指導者向け、大人向け日本語教材、子ども向け日本語教材など）
④多文化共生教育、地球市民学習（総合、国際、人権、環境、人権などの書籍やＮＧＯが作成した国際理解教材など）
⑤その他（県内市町村の国際交流協会発行のニュースレター、国際交流・協力、多文化共生のイベントのチラシなど）
※フロアに設置のパソコンで蔵書検索をご利用いただけます。

KIF SPECIAL INFORMATION

多文化共生・NGO協働推進センター「作業コーナー」をご紹介します

多文化共生・ＮＧＯ協働推進センターでは、ＮＧＯ活動などの支援のために作業コーナーを設けています。チラシ用の印刷機やポスターが印刷できる大型インクジェットプリンタなどがあります。民際協力基金の助成団体、協働事業パートナー団体、財団の団体会員の皆様にご利用いただいております。詳しくは電話でお問い合せください。

●ご利用可能な団体

①民際協力基金の助成団体
②民際協力基金の協働事業パートナー団体
③当財団の団体会員　など

KIF INFORMATION & REPORT

多文化共生・ＮＧＯ協働推進センターから

NEWS

■外国につながる子ども支援ネットワークフォーラム

●日　時：2012 年3月3日（土）　13:00 ～ 16:00
●場　所：JICA横浜４Fかもめ
　　（横浜市中区新港２-３-１／桜木町駅徒歩15分他）
●内　容：外国につながる子どもへの支援について考え、ネットワークを形成するためのフォーラムです。今回は、国際教室に通っていた若者たちの今を知り、進路保障のために小学校・中学校・高校のそれぞれの時期でどんな課題があり、どんなサポートが必要なのかについて話し合います。
●対　象：一般
●定　員：70 名（先着順）
●申込み：お名前、所属、電話番号を電話、メール、ＦＡＸ、往復葉書でお知らせください。
●問合せ：TEL:045-620-0011　FAX:045-620-0025
　　E-mail: miyagasako@k-i-a.or.jp（担当：みやがさこ）

REPORT

■ 10 ／ 23（日）　横浜国際フェスタに参加しました

みなとみらいの象の鼻パークで行われた当イベントに出展して当財団の事業紹介やイベントの案内を行いました。様々な年代の方々に財団のことを知っていただくよい機会となりました。

■ 11 ／5（土）かながわ教育フェスティバルに出展しました

藤沢市の大清水小・中学校で開催された神奈川県教職員組合主催のフェスティバルに出展し、開発教育教材、外国につながる児童生徒支援教材を紹介するとともに、来場者に情報を提供しました。

■ 11 ／ 13（日）外国人コミュニティ連携強化事業でワークショップを実施しました。

県内の外国人コミュニティの現状と課題を共有し、情報提供を行うためのワークショップをＷＥショップひらつか旭店で行いました。地域の中学生や、ボリビアなど南米出身の方々が参加してくださいました。ドキュメンタリー「Roots of Many Colors」の上映後、子どもたちの将来や、学校などについて話し合いました。

■ 11 ／ 26（土）、11 ／ 27（日）　あーすフェスタかながわ 2011 に協力しました

「虹色の希望、明日へつなごう」をキャッチフレーズに、県立地球市民かながわプラザにおいて、あーすフェスタかながわが開催されました。26 日（土）は「外国籍県民フォーラム」において県内の外国人住民が直面する住宅問題に関する講演と議論が行われ、27 日（日）は世界の料理の屋台村、民族音楽や舞踊を披露するステージ、多文化をテーマとした映画の上映、国際理解を深めるワークショップや展示などが行われ盛況でした。当財団は実行委員として企画と運営に協力しました。

■外国人コミュニティの調査を実施中

神奈川県で外国人登録をしている方は、17 万人（164 ヶ国・地域）以上です。その中でも特に数が多い、中国、韓国・朝鮮、フィリピン、ブラジル、ペルーのコミュニティにご協力をお願いしてインタビュー調査を実施しています。課題やニーズなど伺った内容は報告書にまとめる予定です。

湘南国際村学術研究センターから

NEWS

■かながわ非営利組織フォーラム

●テーマ：「私たちが担う公共空間―パブリック・サポートの輪を広げて」
●日　時：2012年3月3日（土）10:00～17:00
●場　所：神奈川韓国会館７階　多目的ホール
　　（横浜市神奈川区鶴屋町2-10-1・横浜駅西口徒歩５分）
●内　容：法律の改正や新たな仕組みづくりによって非営利組織への寄付促進が進められています。非営利活動に対する寄付の文化を育むために、また、寄付に限らず、地域社会を支えるサポート体制を充実するためには、何が求められるのでしょうか？講演やグループワークを通して、参加する皆さんと考えます。
●基調講演：坂口和隆（日本ＮＰＯセンター事務局次長）
●事例報告：樋口公平（三翠会・湘南タゲリ米プロジェクトリーダー）他
●対　象：非営利組織関係者、その他関心のある方々
●定　員：40名程度
●参加費：2,000円（非営利組織スタッフは1,500円）
●申込み：お名前、所属、住所、電話番号を記入の上、ＦＡＸ、メール、往復葉書にて２月29日（水）までにお申込みください。
●問合せ：TEL：046-855-1821　FAX：046-858-1210
　　Email：shimizu@kif.ac（担当：清水・小松）

REPORT

■県内の高校の国際教育を支援しました

ワークショップや講演会の企画相談・講師派遣により県内の高校における国際教育を支援しました。

【実施例】

● 10 ／6（木）　県立横浜翠嵐高等学校

ＮＰＯ法人世界の医療団のエフテル・プリュンさんから世界の医療格差やそれを克服するために同団体が取り組む活動について話を聞いた生徒さんたちは、「医療を受けられない途上国の人々のために、私たちに出来ることは何か」など活発に質問していました。

● 11 ／9（水）　県立横須賀高等学校定時制

ルワンダで義足づくりを行う「ムリンディ／ジャパン・ワンラブ・プロジェクト」のルダシングワ真美さんから、活動に至る経緯や現地での経験、活動にかける思いを聞き、「平和な世の中のために小さなことから誰でも始められることを知った」などの感想が寄せられました。

■ 12 ／9（金）～ 11（日）　第９回インカレ国際セミナー「東アジア共通の家―市民社会と連帯」

全国から、また韓国からの大学生・大学院生が参加し、湘南国際村で２泊３日のセミナーを実施しました。経済協力、平和と安全、市民社会とＮＧＯ、人間の安全保障、文化とネットパワーといったテーマに分かれ、国や大学の枠を超えて、ディスカッションを行いました。

■ 12 ／ 18（日）　世界の入口に立とう―とびだせ！高校生 2011

ＪＩＣＡ横浜国際センターとの共催により、高校生世代を対象にした国際理解入門セミナーを開催しました。参加者は、ワークショップや講義、グループディスカッションを通じて今回のテーマである「豊かさ」について考え、また同年代の仲間たちと語り合いました。

国際学生会館だより　「留学生と市民のつどい」開催される

当財団は県内２箇所で私費留学生を対象として、快適な勉学環境の提供と地域住民の方々との各種交流事業を実施する国際学生会館を運営しています。このコーナーでは、同会館の様子やお知らせを掲載いたします。

“がんばれ日本！がんばれ世界！わたしたちはみんな仲間だ！”東日本大震災の被災地へのメッセージを合言葉に「第１５回さがみはら国際交流フェスティバル２０１１」が、学生会館のあるＪＲ淵野辺駅周辺の３会場で１１月５日の土曜日、賑やかに開催されました。

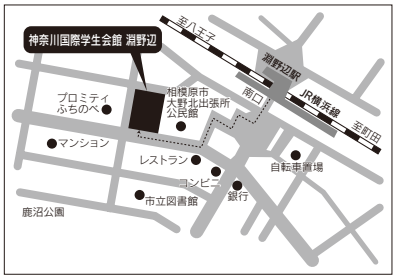
中心会場となるパフォーマンス広場でのオープニングを皮切りに、５４団体が参加し、エスニック料理やバザー、各国各民族の文化紹介と体験コーナー、留学生と市民のつどい、弁論大会など多彩な行事が繰り広げられ、約３千人が楽しい国際交流の一日を過ごしました。

当学生会館では、「留学生と市民のつどい」として会館職員、留学生からなる学生会、支援団体、利用団体等が一体となって様々な催し物を展開しました。当館学生会による模擬店の出店を始め、留学生のセネガル料理講座、ネパールの民族舞踊、馬頭琴演奏が披露され、320 人を超える参加者があり大変好評でした。

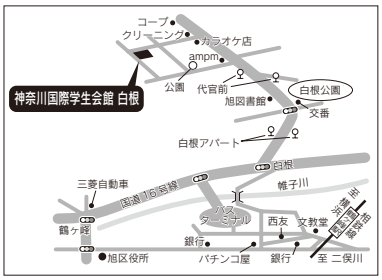
また、会館の語学講座受講者が、その成果発表も兼ねて中国､韓国の歌を熱唱。女声コーラス･グループの“でいらぼっち”など美しい歌声を響かせてくれました。さらに、当館と交流を続けている相模大野学生会館の留学生達は、東日本大震災の被災地に向けて、留学生の自作によるメッセージと歌を贈り、来館者の感動を呼びました。

日頃から当会館の事業を支えてくださる支援団体、協力者の方々の存在は大きいものがあります。今回も当会館の留学生への交流・支援団体である「インターピープルふちのべ」の皆様は､茶道､お琴､着付け体験等の企画により、集いを盛り上げてくださり、いつも留学生を励ましてくださる地元のシンガー・叶友理子さんはミニライブでご協力くださいました。

プログラム終了後には、留学生、ボランティアと一般参加者にも加わっていただき交流会を開催し、さらなる交流の輪を広げました。



神奈川国際学生会館・淵野辺
〒 252-0233　神奈川県相模原市中央区鹿沼台 1-10-22　TEL: 042-768-0211　FAX: 042-768-0213



神奈川国際学生会館・白根
〒 241-0005　横浜市旭区白根 4-24-3　TEL: 045-953-7001　FAX: 045-953-7001

県内ＮＥＷＳ　―　県内の多文化共生に関係するニュースをお知らせします　―

今回は、県内で開催される外国人住民向け防災体験や多言語の防災リーフレット等をご紹介します。

＜講座・シンポジウム＞

○外国人住民向けの防災体験講座

講話や体験を通して、地震や火災など大きな災害が起きた時の行動や日頃からの備えについて学びます。通訳が必要な方には、通訳者がつきます。

日　時：2012年2月4日（土）
　　小田急小田原線愛甲石田駅改札に9時15分集合
場　所：神奈川県総合防災センター
　　（厚木市下津古久280）
定　員：40名（定員を超えた場合は抽選）
申込み：1月16日（月）締切。申込用紙に必要事項を記入の上、FAXで申込み
参加費：無料（交通費は実費負担）
主催・問合せ：神奈川県県民局くらし文化部国際課
　　TEL／045-210-3748
　　FAX／045-212-2753
※申込みなど講座の詳細：県ホームページ
ＵＲＬ：http://www.pref.kanagawa.jp/div/0215/

○『外国人の立場から考える地震災害
～みんなが安全に生きるために～』

川崎市近隣に在住の外国人住民などに、それぞれの東日本大震災当日とその後の体験を聞き、外国人の立場から地震災害を考えます。

日　時：2012年3月3日（土）午後
場　所：川崎市国際交流センター・ホール
　　（川崎市中原区木月祗園町2-2）
定　員：200名　無料（高校生以上）
申込み：2012年1月25日（水）10：00～
　　電話・FAX・来館・メールにて受付
主催・問合せ：（財）川崎市国際交流協会
　　TEL／044-435-7000
　　FAX／044-435-7010
　　E-mail kiankawasaki@kian.or.jp

＜多言語の防災リーフレット等＞

○『地震に自信を』

地震が起きたときに身を守るための行動や普段からできる対策について多言語でまとめられた冊子です。

言語①：スペイン語、タガログ語、タイ語、ベトナム語、ラオス語、カンボジア語版
作　成：かながわ自治体の国際政策研究会
ＵＲＬ：http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/16755.pdf
問合せ：TEL／045-210-3748
言語②：英語、中国語、韓国・朝鮮語、ポルトガル語版
作　成：（財）消防科学総合センター
ＵＲＬ：http://www.bousaihaku.com/cgi-bin/hp/index2.cgi?ac1=B934&ac2=&ac3=3907&Page=hpd2_view
問合せ：TEL／0422-49-1113

○『多言語防災リーフレット』

携帯できるポケットサイズの多言語防災リーフレットです（すべて日本語併記）。

言語①：英語・ハングル・中国語版
言語②：スペイン語・ポルトガル語・タガログ語版
言語③：ベトナム語・タイ語・インドネシア語版
作　成：横浜市政策局国際政策室
ＵＲＬ：http://www.city.yokohama.lg.jp/seisaku/kokusai/coexistence/disast/
問合せ：TEL／045-671-3826

＜ウェブサイト＞

○外国人住民災害支援情報

東日本大震災における外国人住民災害支援情報や参考リンク集が掲載されています。他にも、災害時の外国人被災者支援で使用できる多言語の文例集がありダウンロードしてそのまま活用できるようになっています。

作　成：（財）自治体国際化協会(CLAIR)
ＵＲＬ：http://www.clair.or.jp/tabunka/shinsai/index.html
問合せ：TEL 03-5213-1725

○『やさしい日本語』関連情報

災害時の外国人に役立つ日本語言い換え表現「やさしい日本語」を紹介しています。「やさしい日本語」版災害基礎語彙や東日本大震災用に新たに作成された掲示物も掲載されています。

災害時にはポスターや案文作成等の支援活動を行ってきました。阪神・淡路大震災以来、これまでに作成した掲示物や情報案文はHP上に掲載しています。

作　成：弘前大学人文学部社会言語学研究室
ＵＲＬ：http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/index.html
問合せ：TEL／0172-36-2111

SPECIAL INFORMATION

ミュージアムサミットに参加しませんか？

第５回 21 世紀ミュージアム・サミット
100 人で語るミュージアムの未来Ⅱ ～人々をつなぐミュージアム～

池澤夏樹さん

ジョン・ホールデンさん

当財団では地域文化の重要な拠点としてのミュージアムに注目し、2004年から隔年でシンポジウムを開催しています。第５回では、基調講演のほか、神奈川県内を含む美術館、歴史博物館、科学博物館などに関わるミュージアム界の多数のキーパーソンが協力して企画した４つの分科会で、ミュージアムの未来を考えます。

震災の影響や経済不況が続く中、ミュージアムが社会に果たす役割を、ミュージアム関係者だけでなく様々な参加者のみなさんと一緒に考えます。

■基　調　講　演：池澤夏樹（作家）、ジョン・ホールデン（英国シティー大学客員教授）
■分科会企画協力：佐々木秀彦（東京都美術館）、小川義和（国立科学博物館）、岡本真（アカデミック・リソース・ガイド（株））、並木美砂子（千葉市動物公園）ほか
■分科会話題提供：山西良平（大阪市立自然史博物館）、西田由紀子（よこはま市民メセナ協会）、南嶌宏（女子美術大学教授）、稲葉洋子（神戸大学付属図書館「震災文庫」担当）、蓑豊（兵庫県立美術館長）ほか（敬称略）

●日　時：2012年2月4日（土）、5日（日）10:00～18:00
●場　所：湘南国際村センター（葉山町）
●定　員：80名（応募多数の場合抽選）※２日間とも参加できる方
●参加費：2,000円（２日間）※交流会等への参加費別途
●申込み：詳細を当財団ホームページで確認の上、お名前・所属・住所・電話番号・E-MAIL・希望分科会・参加動機を明記のうえ、ＦＡＸ又はメールで下記連絡先まで。
●締　切：2012年１月12日（木）
●問合せ：TEL: 046-855-1822 FAX: 046-858-1210
Ｅｍａｉｌ：museum@kif.ac（担当：湘南国際村学術研究センター　成田・尾崎）
※詳細の郵送をご希望の方、往復葉書で応募希望の方はお電話でお問い合せください。

INFORMATION

財団賛助会員募集のご案内

当財団の活動を支援してくださる賛助会員を随時募集しています。多文化共生の地域社会づくりなど幅広い活動を行っている当財団をぜひご支援ください。会員になってくださった方には各種サービスをさせていただいています。

●会員の皆様へのサービス
・情報誌『ＫＩＦ　ＮＥＷＳ』をお送りします。
・当財団が発行する出版物の割引サービスが受けられます。
・会員証の提示で、当財団が提携しているエスニック・レストランの優待サービスが受けられます。
※ 提携レストラン情報→ http://www.k-i-a.or.jp/kokusai/tabunka/ethnic/
※ 会員の皆様へのサービスが拡大される場合には、本誌でお知らせするとともに、次のＵＲＬに掲載いたします。http://www.k-i-a.or.jp/member/

●会　費
（1）学生会員 1,500 円以上　（2）一般会員 3,000 円以上　（3）団体会員 10,000 円以上

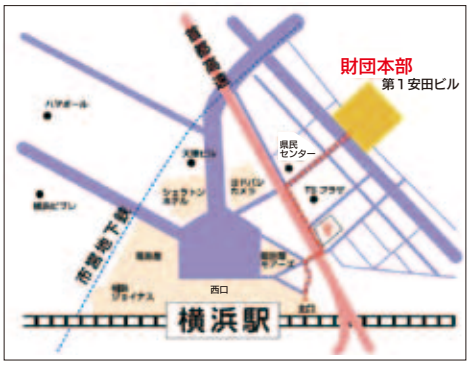
●問合せ
入会を希望される方は、次のＵＲＬからお問い合せいただくか、財団事務所にお電話をください。資料と会費の支払用の郵便振替用紙等をお送りいたします。
申込用ＵＲＬ→ https://secreg.jp/sr/k-i-a.jp/form/NDU1
TEL：045-620-0011

かながわ国際交流財団（略称ＫＩＦ）は…

地球のすべての人が、国境や人種、文化の違いをこえて、人間らしく暮らせる社会の実現のため、次の４つを柱として、事業を展開しています。

１　多文化共生の地域社会かながわづくり
２　県民等の国際活動の支援、ＮＧＯ等との連携・協働の促進
３　地球規模の課題等に対応できる国際性豊かな人材の育成
４　学術・文化交流を通じ、地球規模の課題解決に向けた地域からの将来像の提案

財団本部（多文化共生・NGO協働推進センター）



湘南国際村学術研究センター

広告を掲載しませんか？

本誌は、国際協力・国際交流の活動をしている市民グループをはじめ、図書館、公民館、パスポートセンター、県内の高校、市町村の国際担当部署、教育委員会、区役所、県庁、財団賛助会員の皆様などに配布しています。
発行部数：5,000部
掲載に関する情報は次のURLか、お電話で
http://www.k-i-a.or.jp/ad/

財団法人 かながわ国際交流財団 **ニュースレター『KIF NEWS』　2012年１月１日発行　第27号**
発　行／財団法人かながわ国際交流財団　　発行回数／年４回
［財　団　本　部］〒221-0835　横浜市神奈川区鶴屋町2-21-8 第一安田ビル4階　TEL：045-620-0011　FAX：045-620-0025　http://www.k-i-a.or.jp/　E-mail:tabunka@k-i-a.or.jp
［湘南国際村学術研究センター］〒240-0198　三浦郡葉山町上山口1560-39 湘南国際村センター内　TEL：046-855-1820～1822　FAX：046-858-1210
［神奈川国際学生会館・淵野辺］〒252-0233　相模原市中央区鹿沼台1-10-22　TEL：042-768-0211　FAX：042-768-0213
［神奈川国際学生会館・白根］〒241-0005　横浜市旭区白根4-24-3（相鉄線鶴ヶ峰駅下車徒歩15分）　TEL：045-953-7001　FAX：045-953-7001
印刷・DTP／有限会社　青史堂印刷

＊情報誌に掲載されているイベントへのお申し込みの際にお知らせいただいた個人情報は、イベント受付以外の目的には使用いたしません。